



週報

2015~2016 年度 RI 会長 K.R. ラビンドラン
RI のテーマ 『世界へのプレゼントになろう』
第 2570 地区 ガバナー 高柳 育行

国際ロータリー
第 2570 地区

狭山中央ロータリークラブ

〔例会場〕 狭山東武サロン〒350-1305 狭山市入間川 3-6-14 TEL 04-2954-2511
〔事務所〕 〒350-1305 狭山市入間川 1-24-48 TEL 04-2952-2277 FAX 04-2952-2366
<http://www1.s-cat.ne.jp/schuohrc/E> - mail:schuohrc@pl.s-cat.ne.jp
会長 江原伸夫 会長エレクト 佐藤圭司 副会長 浜野貴子 幹事 小島美恵子

〔第 3 グループ内の例会日〕 新狭山(月)、入間(木)、入間南(火)、飯能(水)、日高(火)、狭山中央(火)
所沢(火)、新所沢(火)、所沢西(火)、所沢東(木)、所沢中央(月)

第 1075 回(3 月 1 日)例会の記録

点 鐘 江原伸夫会長
合 唱 国歌斉唱 奉仕の理想
第 2 副 S A A 佐々木君 佐藤君

※出席報告

会員数	出席者数	出席率	前回修正
36名	28名	76.47%	54.83%

会長の時間

江原会長



こんにちは、先週 27 日土曜日に開催されました第 2570 地区第 3 グループの I M には多数ご参加いただきました。また、23 日火曜日に行いました家族同伴親睦日帰り旅行での河津桜まつりは如何でしたか？今回は皆様のご都合もあって少人数の旅行ではありましたが、私たちの日頃の行いの良さに天気の方も前日までの予報を覆し、この日だけは気温も暖かく風も穏やかで、肝心の河津桜は原木の花も含め、満開の状態を維持してくれていました。バスガイドの伊藤めぐみさんも、長年訪れているなかで、河津桜の原木の花と同時期に満開となっているのを見学したのは初めてだと言っておりましたので、皆様の日頃の行いの清さに改めて感謝してお



ります。ありがとうございました。ご家族の皆様方にもよろしくお伝えください。そして残念ながら今回不参加だった方々には、申し訳ございませんが、参加者の方からの土産話に耳を傾けていただきたいと思います。

次の家族同伴お花見夜間例会は、来月 4 月 5 日の火曜日に、前半の親睦ゴルフコンペでスコアメイクに励んでいただいた後、午後に昨年と同じニックスのあの部屋で行う予定でいますので、ご家族の方にもお声掛けいただき、今から予定をその日に合わせておいてください。今回はゲストの方も当クラブでは初めての方をお招きしておりますので楽しみにしておいて下さい。

前置きが長くなりましたが、今日はその『お花見』の歴史についてお話ししたいと思います。

『花見』は日本人が古来から楽しみにしていた春の行事です。奈良時代には花といえば梅や萩を指していましたが、平安時代になって、紫宸殿の前庭に「左近の梅」と「右近の橘」が植えてあり、元々のしきたりでは梅であったものを、桓武天皇が平安京造営の時に「桜」に植え替えたようです。その後この時代の貴族たちは、この時期に咲く数多くの花の中でも桜の花を春の花の代表格として愛で、歌を詠み、『花見』の宴を開いて楽しむようになりました。以来、日本人にとっての花は桜の花を意味するようになり、『花見』といえば、桜の花を見るために野山に出かけることを差し、桜以外の花を見に行くときは【梅見】【観梅】【観菊】などとその花の名前を付けて表します。

しかしこのことが『花見』の原点かという、どうもそうではなさそうで、【古事記】の上巻に「木花之佐久夜毘売（このはなのさくやひめ）」という姫が出てきますが、この姫は大山津見神（おおやまつみのかみ）の娘であり、桜を象徴する姫神で田の神とされています。山の神は春になると里に下りてきて田の神になると言い、この木花之佐久夜毘売は、父の命令で桜の花に姿を変えて稲の穀霊として地上に現れたものとされており、そのため、古代の人たちは、桜の咲き具合によってその年の稲の収穫を占ったり、桜の開花期に種もみをまく準備をしたりしていました。花が美しく長く咲くことを願い、春の一日酒の肴を用意して山に登り、桜の木の下で花に祈りつつ一時を過ごしたのでしょう。そしてこれが現在も続いている『花見』の原型とも言われているようです。

鎌倉、室町時代になると、地方に豪族や武士の社会にまで広がり、桃山時代には、豊臣秀吉が吉野と醍醐で盛大な『花見』をしたことはよく知られていますが、『花見』の楽しみが一般に知られるようになり、大衆にも一層身近なものになったようで、江戸時代になると、春の行楽として『花見』が庶民の間にも広がり、酒を酌み交わす『花見』になっていきました。江戸時代は園芸が盛んになった時代でもあり、桜の品種改良が進んだことで、身近な場所で『花見』が楽しめるようになったのです。三代将軍家光が上野に寛永寺を建てて吉野の桜を移植したり、四代将軍家綱が墨堤（隅田河畔）に桜を植えたことに始まり、八代将軍吉宗の時には、本格的に桜が植えられようになり、飛鳥山を桜の名所にし、『花見』の場所も増えました。こうしてますます庶民の間に広がっていきました。そしてこれらの場所は今でも東京の『花見』の名所になっています。

桜には沢山の種類がありますが、日本の桜のおよそ8割を占めるのが【染井吉野】です。

この桜は、【大島桜】と【江戸彼岸桜】を交配して観賞用に作られたもので、江戸染井村（豊島区）



の植木屋が〈吉野桜〉として世に売り出し、後に吉野山の山桜と間違えないように【染井吉野】と改名されました。

花が大きく香りもよい【大島桜】の華やかさを、花が咲いた後に葉が出てくるという【江戸彼岸桜】の特徴がより引き立て、一躍大人気となりました。さらに、十年ほどで立派な木に成長するため、明治以降主流となっていきました。ただし、この桜は自力で繁殖できず、接ぎ木や挿し木でしか増やす方法はありませんが、そのため、同じ条件下で一斉に開花するので、開花時期等統計を取ったり、お花見をするには適していると言えるでしょう。近年現存する桜の寿命が話題となっており、その対応が課題となっています。この桜の寿命は六十年という説もありますが、弘前城には樹齢百年を超える古木が300本以上あるそうです。昔から「桜切るバカ・梅切らぬバカ」という言葉を聞きますが、弘前城ではリンゴ栽培のノウハウを生かし積極的に選定をするとともに、殺虫剤の使い方や肥料の与え方、土の入れ替えなどを工夫する「弘前方式」という管理法があるそうです。なんでもそうですが、よく手入れをすることが大事のようです。

今日は300種あると言われている桜の一部をコピーしてきました。先週の色鮮やかな河津桜を思い返しなが、来月5日のニックスから観る稲荷山公園の夜桜に思いを馳せていただきたいと思います。今日の会長の時間を終わります。



幹事報告

小島幹事

(定例理事会) 次の件が審議・承認されました。

- (1) 3・4月のプログラム承認
- (2) 入会希望者について (櫻沢俊子様)
- (3) 2016～2017年度、新米山奨学生受け入れについて
 1. 2016年国際ロータリー年次大会(ソウル)参加旅行募集案内について
 2. 地区より、第5回日台ロータリー親善会議について
 3. 次年度地区青少年交換委員推薦の依頼について
 4. 入間基地より観桜会のご案内について
 5. 平成27年度「ASエルフェン埼玉 選手激励会開催のお知らせについて
 6. 第3グループ会長幹事会開催のお知らせについて
 7. 第6回「青少年を育てる狭山市民会議理事会」のお知らせについて
 8. 例会変更 所沢中央RC
 9. 受贈会報 入間RC 所沢RC 新狭山RC
所沢西RC
 10. 回覧 学友会ニュース 2016年2月号(第194号)
ハイライトよねやま 191

委員会報告

◇公共イメージ

栗原成実委員長

2月7日に紫雲閣で、地区のクラブ奉仕部門のセミナーがございまして、私と若松さんが出席致しました。遅ればせながら、私が代表して報告致します。増強は、当クラブは着々と進んでおりますので、結果論だけで報告致します。

1996年、今から20年前になりますが、狭山中央ロータリーが一番多かった時は48名の会員がおりまして。今度1人入会致しまして、37名ですから、10名減っているわけです。ちなみに狭山の3つのクラブは、新狭山がその翌年1997年に51名、昨年13名です。いかに減ったかという事です。そして狭山ロータリークラブは2000年に48名、昨年は0名になっております。この約25年位の間に、5つのクラブが消滅したり、合併したりしております。2570地区は2015年7月に1648名だったのが、2015年11月には1652名と微増しており

ます。ガバナーが公式訪問をして思った所感でございますが、しっかりしているクラブは、出席率が高い、年度計画がしっかりできている、奉仕活動が活発なクラブ、会員が増えているクラブ、会員同士が和気あいあいとしているクラブ、ロータリー情報が良く理解されているクラブ、クラブの目標に向かって努力しているクラブ、年齢構成のバランスが良いクラブ、良き指導者のいるクラブ、ということで、この9項目がガバナーが思った良いクラブの評価ということです。

その他色々ありますが、特に心掛けることの中で、ロータリーの基本はクラブの例会であるので、例会を充実させることが一番重要であるとガバナーはおっしゃってございました。これらをもとに、公共イメージを広く市民に広報して欲しい、会員増強についても同じように取り組んでほしいということでした。以上報告を終わります。

「会員卓話」・・・・・・・・

「大世界史」

(文春新書/池上彰・佐藤優共著) について

守屋昭夫パスト会長

昨年秋、本書が刊行され早速買い求めた。その前に同じ共著による「新・戦争論」、又佐藤氏による「世界史の極意」



などの同じ線上に位置している書を購入して読み、興味を持ったので御紹介する。

共著のお二人については、「池上彰」氏はジャーナリスト、NHKを経て、記者やキャスターなどを歴任し、現在東京工大教授。先般朝日新聞の不祥事に関連して批判文の掲載を拒否されるもひるまなかった、なかなかの硬骨漢でもある。

「佐藤優」氏は、元外務省官僚(主任分析官)として活躍、退官後、外交、国際関係の評論家として独自に活躍中で、宗教、外交分野でのインテリジェンス(情報)は第一人者である。

ここで本書の一部、「はじめに」と11章のテーマをまず紹介しておく。

「はじめに」

欧州に大量に流入する難民の大波。現代版の民族大移動と呼ぶ段階に達しているのかも知れません。難民の窮状を見かねたドイツのメルケル首相は、多数の難民・移民の受け入れを表明。ドイツめざして、地中海やバルカン半島から難民の奔流が続いています。

佐藤優氏との対談が終わった後、この問題が欧州を揺るがすようになりました。歴史を振り返ると、かつてのゲルマン民族大移動をはじめ、数々の民族大移動を繰り返して、現在のヨーロッパの民族構成が形成されました。いまや、その現代版が始まっている。欧州のいまを見ると、そんな歴史的事実を想起してしまいます。

アフリカのナイジェリアやマリでの紛争から逃れた難民たちは、北アフリカを北上。モロッコやチュニジア、リビアなどを経由し、密航船に乗って地中海を北に進み、イタリアに達します。内戦状態のリビアからの難民も、同じルートでヨーロッパへ。ところが、難民ですし詰めになった密航船は、地中海で次々に転覆。大勢の犠牲者を出します。それでも難民の勢いは止まらず、イタリアに入った難民たちは、フランスを経由してイギリスへと向かいます。イギリスは難民の受け入れ態勢がしっかりしていて、難民として認められた人は、定住することが認められ、当座の生活費まで支給されるからです。フランスのカレー海岸は、英仏海峡トンネルでイギリスに入る絶好の位置にあるため、ここでイギリスに入るチャンスをうかがう難民たちのたまり場になっています。一方、シリア難民は、陸路を選びます。まずはトルコに入り、そこからマケドニア、セルビアを経て、ハンガリーへ。ここからドイツへと向かいます。ドイツも、難民や移民の受け入れに積極的だからです。さらに北のスウェーデンへの入国を目指す人たちもいます。ドイツで難民申請すると、難民認定の結果が出るまでの数か月間、生活費までが支給されます。こうなると、難民とは言えない人たちも押し寄せてきます。いわゆる「経済難民」あるいは不法移民です。

ドイツの寛大な措置の方針は、残した家族へ電話で伝えられ、後続の難民たちもドイツを目指します。こうして、今年の難民申請者数は去年の4倍

の80万人に達する見込みです。この結果、ドイツには2年間で100万人のイスラム教徒が入って来ることになります。このところヨーロッパで見かけるイスラム教徒の数は増加の一途です。思わず「ここはどこ？」とつぶやいてしまうほどです。今回の「民族大移動」によって、キリスト教社会は大きな変容を迫られるでしょう。民族が移動することで、時代が変わる。世界の歴史は、こうやって形作られてきたのだということを痛感します。

ヨーロッパ各国が難民の大波の前でたじろぐ中で、ドイツのメルケル首相は敢然と難民受け入れを表明しました。

ドイツは、第二次世界大戦中、ナチスによるユダヤ人大虐殺を経験しました。ナチスによる民族抹殺計画は、ユダヤ人のみならず、さまざまな少数民族も対象にしました。その反省から、戦後のドイツは、さまざまな民族を受け入れるようになっていきます。過去の反省から、いまがある。歴史に学ぶとは、こういうことを言うのでしょうか。

その一方で、皮肉な事態も起きています。1989年、当時のハンガリーは、オーストリアとの国境の鉄条網を撤去しました。東欧でいち早く民主化を進めたハンガリーは、自国民の逃亡を防ぐための鉄条網を恥と考えたからです。その結果、当時の東ドイツ国民は、自由な行き来ができたチェコスロバキアに入り、そこからハンガリー、オーストリアを経て西ドイツに入国することができました。これをきっかけに、多くの東ドイツ国民が、ハンガリー経由で西ドイツに逃げ出しました。これが「ベルリンの壁」崩壊へとつながっていきます。

ところが、いまのハンガリーは、セルビアから多くのシリア難民が入ってくるのを阻止しようと、セルビア国境に鉄条網を建設しました。かつて自国民に国境を開放したハンガリーは、今度は難民の受け入れを認めようとしません。歴史の皮肉です。佐藤優氏との対談は、これが二冊目です。前著「新・戦争論」は、多くの読者を獲得できました。今回は、現代をよりよく理解するためには歴史の学習が欠かせないという点で意気投合。世界史から現代を見ることの必要性という視点で本をまとめました。

現代は、後世の歴史家から見て、どのように位置

づけられるのか。アラブ民族大移動なのか、イスラム教の欧州進出なのか。そんな角度から見ると、現代は別の様相を見せるはず。そのためにお役に立てれば幸いです。

2015年10月

ジャーナリスト・東京工業大学教授
池上彰

- 1.なぜ、いま、大世界史か
- 2.中東こそ大転換の震源地
- 3.オスマン帝国の逆襲
- 4.習近平の中国は明王朝
- 5.ドイツ帝国の復活が問題だ
- 6.「アメリカ vs.ロシア」の地政学 (Geopolitics)
- 7.「右」も「左」も沖縄を知らない
- 8.「イスラム国」が核をもつ日
- 9.ウェストファリア条約から始まる
- 10.ビリギャルの世界史的意義
- 11.最強の世界史勉強法

以上の11章はどれも up to date であり気をそられるが、此处では時間的な制約もあり、私達の身近な事なので7.の沖縄の章を要約してみたい。本文の項目には入っていないが「はじめに」の中で述べているように、ヨーロッパに大量に流入している難民の大波は、かつての数々の民族大移動にもすべき現代版として著者も見すごすわけにはいかず、さりとて現在進行型として冒頭に持ってきたのであろうが、その中でも二大目的地となっているドイツとイギリスがどうなっていくのか、世界中が固唾をのんで注目しているところであろう。さてここで、戦後しばしば沖縄が、その地理的關係から問題になって、我々の悩みの種になっている。最近中国が沖縄、特に尖閣への領土的野心を表して実力行為を行ってきているので、我が国も国益を守るためにいまの世界における日本の立ち位置をしっかりと認識する必要がある。

昨年(2015)は戦後70年という節目の年であった。まずロシアが5月9日、第二次世界大戦の戦勝70周年を祝った。我が国の安倍首相は式典への出席を見送った。もし行っていたら「敗戦国代表」になってしまう。なぜか？

この第二次世界大戦の戦勝国と敗戦国という枠組みは、日本人が意識している以上に強固である。

そもそも国際連合 (United Nations) とは、戦時中の連合国がそのまま国際機関になっただけで、戦勝国クラブのようなものである。我々が戦った(日、独、伊) 枢軸国は今でも依然敵国のまま、だから日本もドイツも安保理の常任理事国にもなれないのである。

この戦後70年の節目として、安倍首相は談話を発表した。

冒頭首相は、「8月は私たち日本人に、しばし立ち止まることを求めます。今は遠い過去だとしても、過ぎ去った歴史に思いを致すことを求めます」と述べ、この「思いを致す」として「植民地支配」「侵略」「痛切な反省」「心からのおわび」という4つのキーワードを入れ、又このことに関して「謝罪をし続けることは、もうやめにしたい」と語り、はたして良かったのかどうか疑問が残った。

特に「植民地支配から永遠に決別し、すべての民族の自己決定権が尊重される世界にしなければならない」という箇所は、今後沖縄との関係で重要な政治的意義を帯びることになるのではないかと案じられる。ここで私(守屋)は、かつて民主党の菅首相がTVの中で独り言のように「沖縄は独立すればいいのだ」とつぶやいていたのを思い出す。

(あれは何だったのか?)と。もともと沖縄は、独立国家(琉球王国)のあったところである。現在沖縄の人々は「沖縄人」と「日本人」という複合的なアイデンティティ (Identity, 同一性帰属意識) をもっている。そこで中央政府が、これ以上強硬な態度を取れば、それを植民地支配とみなして自己意識を「沖縄人」によりシフトするかもしれない。今のところ沖縄人にとって重要なのは、独立ではなく「我々の運命は我々が決める」という自己決定権の確立である。現時点では沖縄は日本の一員であることを選択しているが、どういう方に向かうかは、今後の状況の推移にかかっている。(本土側の対応?)つまり、沖縄はいまの日本にとっていわばアキレス腱ともいえる。しかしそのことの意味が本土の方で十分に自覚されていない。政治レベルの話だけでなく、全国紙をいくら読んでもこの問題はよく分からない。

又、私(守屋)の回想になるが、かつて日本全国の大学から東京に集まってきた左翼学生(全学連)

が東大の安田講堂を占拠したて籠って、機動隊と攻防戦をやったことがあるが、あれの火元は東大病院の精神科の医局であった。事件が終了したあと、彼らのリーダーの1人に「島」という若い医師がいて、その医局から私の職場であったM病院に転勤して来たが、常々「自分は必ず革命をおこす」と酒を飲む機会があると広言していたが、やがて沖縄へ移住して行った。今にして思えば、あれはあちらへ独立も含めた左翼活動のために行ったのだと合点がいった。(その後酒を飲み過ぎて死んだと聞いた。)

沖縄の米軍基地の移転(普天間→辺野古)問題については最近、沖縄に基地を集中させるのは米軍にとって不都合だという見方も出てきている。この地で米軍が参戦した場合、中国からのミサイルで沖縄米軍基地が壊滅することが懸念される。そのため米海兵隊は沖縄から一部をグアムへ移すプランがあるという。こうしてむしろ一撃で叩かれない米軍が温存されることによって抑止力が高まるという考え方もあるという。

本書の大きなテーマの一つが、過去の帝国の存在が世界各地で現代にも大きな影を与えていることであるが、今の日本には「帝国」であったことの記憶は希薄である。しかし少なくとも沖縄問題に関してはそのことを自覚すべきである。今、世界で起きている動きをより深く読み解けるようになる筈である。

2014年に英国からの独立の賛否を問う住民投票で、スコットランドが世界の注目を集めた。他にも、スペインのカタルーニャ地方やバスク地方、ベルギーのフランドル地方なども少数民族が既存の国家から分離独立を目指す動きがある。中国のチベット自治区、新疆のウイグル自治区も同様である。つまり世界各国で国民国家は「揺らぎ」を見せている。沖縄もこうした世界共通の問題の一つである。



江原君 本日の会員卓話をお願いしております守屋先生お話しを楽しみにしておりました。よろしくお願ひ致します。

小澤パスト会長、本日からのご出席本当に嬉しく思っております。これからも健康にご留意頂きます事をお願い致します。

小島君 小澤パスト会長、心よりお待ちしております。守屋パスト会長、卓話楽しみにしておりました。よろしくお願ひ致します。

益子君 守屋先生、卓話楽しみです。

小澤君 長い間例会を欠席させていただき誠にすみませんでした。これからもよろしくお願ひ致します。

佐藤君 外は冷たい風が吹き荒れて、桜の開花が待ち遠しい日々が続いております。皆様お元気ですか、さて今日の会員卓話は守屋パスト会長です楽しみにしております。それと小澤パスト会長お久しぶりです、待っていました。

吉川君 河津桜最高でした。鮮やかなピンクで心が洗われました。

会員誕生祝 片山君 小林君 柴田君

夫人誕生祝 小澤君 小幡君

結婚記念日 栗原(成)君 奥富君

※次の例会 第2副SAA 田端君 高田君

3月15日(火) 12:30~13:30

外来卓話 高柳 清様 (元狭山RC会員)